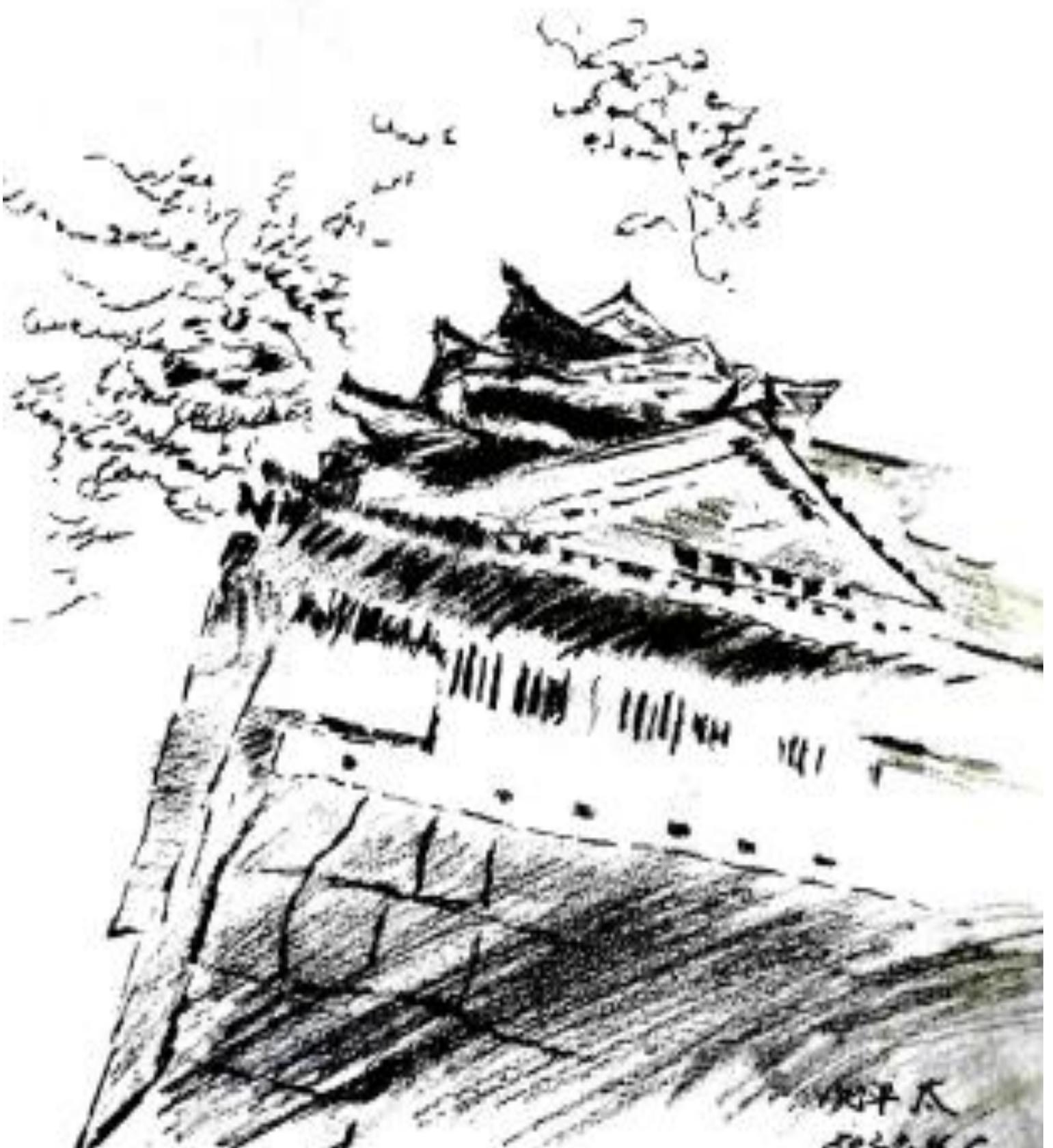


閣守天柳川

2024年8月号



大平八
2024年8月

第16回例会 2024年7月15日(月) 投句締切分

お題 「魚」

岩原 一角 選

凄顔その深海魚人が喰う

佐野正邦

外来魚盗難バイクの池さらえ

蔵内歳重

雑魚だつて抜かれてならぬ骨がある

船木しげ子

熟成へ人も魚も増す旨味

秋田あかり

温暖化魚はいいな住まい変え

加山勝久

北上のマグロ諫める温暖化

小林満寿夫

秋刀魚焼く煙を消した物価高

真鍋心平太

雑魚だつて滝の流れに食らいつく

島根写太

夏祭り金魚すくいで恋を釣る

岡野とら丸

定年後夫はすっかり回遊魚

林ともこ

雑魚ですが出汁がよく出る亭主殿

美代

魚屋へ太公望がお買物

岡野とら丸

太陽の温み知らない深海魚

井澤壽峰

小判鮫大魚の腹で世を泳ぐ

島根写太

雑魚だつてやる時はやる下克上

林ともこ

(五客)

佳5 子ら描く魚はいつもパック入り

加山勝久

佳4 キンギョにもいじめの世界あるらしい

久世高鷲

佳3 太刀魚を買つとソマリア産でした

武智三成

(三才)

佳2 松茸とサンマ値段を競い合つ

久世高鷲

佳1 汚染水飲んでませんと胸を張り

春田敏晴

人 一匹の金魚と暮らすワンルーム

春田敏晴

地 本当の私の姿人魚姫

由夏

天 水俣の少女苦海の人魚姫

平川柳

軸 魚さえ国産高く輸入品

岩原一角

(選評)

人の句

侘しい生活だが、人はいずれひとり身でしょう。

川柳というものがひとそれぞれの生き様を反映する弁芸である以上、
こういう句もありでしょうね。

地の句

人魚姫・・・沖縄の辺野古のジユゴンの海を守っている少女を
連想しました。私の勝手な解釈です。

天の句

汚染水！ここで出ましたね。私でさえ頭の隅にいつてしまつて
いたものを想いおこさせていただきましたあ。

お題 「市場」

浜脇 蓬生 選

- 売り手市場若いパワーが光ります
人の輪がガレージセール包み込み
ほおずき市オレンジ色の恋でした
買い手市場派遣ばかりの職安所
朝市を覗く浴衣と下駄の音
初物へご祝儀相場弾む声
村はずれ軒下市場善意箱
もう一度母と行きたいあの市場
ポイントはないがおまけのつく市場
祈るだけ為替市場は別世界
姉ちゃんと呼ばれつい買う歳になり
賈物の中に本物蚤の市
値切り魔の母のお供を嫌う父
青物屋の西瓜両手に盆帰省
黒門も錦もまるで東大門
- 船木しげ子
加山勝久
直子
蔵内歳重
山野寿之
岡野とら丸
東尾由子
春田敏晴
秋田あかり
武智三成
青空
山野寿之
松島きよみ
蔵内歳重
由夏
- 佳5 年重ね古本市場遠くなる
佳4 市場介入騒いでいると茄子の花
佳3 お使いに行くと市場が温かい
佳2 能登の町復活願う朝の市
- 武智三成
三枝なな
真鍋心平太
佐野正邦

(五客)

- 佳1 マルシエにて曲がった茄子と語り合う
直子

(三才)

- 人 歩けない父がヤフオクメルカリへ
真鍋心平太
地 魚市場眼と眼が合つて鯛しゃぶに
林ともこ
天 暗闇の鬼市(きし)で売られる人の肉
平川柳
軸 市場価値失いゆるく生きている
浜脇蓬生

(選評)

人の句

昔ながらの市場は減ってきましたが、
人間がいる限り市場は形を変えて続いて行きそうです。
希望がある楽しい句です。

地の句

パック越しではなく直に見つめ合う鯛の眼はとても
澄んでいたことでしょう。活きのよい鮮魚は美しく、
海中の幸せを運んでくれるようです。

天の句

昭和の風情や温かさを詠んだ句が多い中で
異彩を放っていました。「鬼市」を調べてみたら
「人ならざるものの露天市」と出ていました。
鬼市を開いた瞬間に人が「人ならざるもの」に
変化(へんげ)するのかもしれない。

お題 「雑詠」

真鍋心平太 選

地球から壊れますよの声を聞く

哀しみの運命線に杭を打つ

バスツアーお里が知れるバイキング

孫と夫回転寿司の皿の数

老いてゆく夫と笑いの時過ぎ

絵に書いた餅だと地球儀は抜かす

人間をしゃぎ過ぎたか深い皺

夏座敷午睡を撫でて風渡る

夕ご飯父の手でかい威圧感

トワエモアの歌う空にもあつた恋

ユキチからエイイチに代わり字余りに

半額の弁当上がる血糖値

カメムシに生まれた意味を問う捕獲

膝痛む歩く楽しみ外されて

父さんの人脈逝ってからわかる

島根写太

平川柳

松島きよみ

青空

青空

小林満寿夫

秋田あかり

松島きよみ

武智三成

信子

浜脇蓬生

船木しげ子

三枝なな

堀内きみ子

林ともこ

(五客)

佳5 揺れ止まぬ愛のブランコ漕ぐあばら

佳4 触れませんでしたぶんここから恋だから

佳3 タテヨコに揺れて陽気なイヤリング

平川柳

直子

岡野とら丸

(三才)

佳2 げんこつを開けばきつと青い空

佳1 人間の知恵がニンゲン苦しめる

島根写太

岡野とら丸

人 良い人で終わりたくない我の生

地 鏡には今のわたくしだけがいる

天 理由もなく涙溢れる八分がゆ

軸 友達が随分減った紙芝居

蔵内歳重

直子

林ともこ

真鍋心平太

(選評)

人の句

可もなく不可もなく生きてきて、

その延長線上に平穏な今があるのだが、

ふとしたときにこれで良かったのか、

やり残したことは無いのかと、思うときが誰にでもある。

地の句

この句のわたくしは人の句のわたくしだ。

もう一人のわたくしがいるのではないかと、

問いかけているわたくし。

天の句

何も飾らない素朴な八分がゆを前にしたとき

涙があふれる。理由はあるのだ。

八分がゆを見ると思い出す

一言では言い尽くせない遠い日の諸々のこと。

お題 「永遠」

互選

1点

甘い声犬にはかける永遠の愛
永遠の若さを保つ山歩き
永遠に限りが無いのも辛かろう
笑顔良しこのまま止まれ痴呆さん
置き土産永遠に残す綴り方

忘却の彼方に誓い飛んでゆき
時効など永遠に無い核の罪思い出作る
手を合わす静かな暮らし続くよう

2点

永遠はこの世にあると思わない
地球から永遠に無くなれ戦争は
裏金が永遠に続くと思うなよ
故郷の温みは永遠に変わらない
永遠の愛今しつかりと胸に抱く
永遠に女の涙惑わされ

サグラダも永遠の未完に別れ告げ
とりあえず神に誓った永久の愛
微笑みやめるモナリザ地球危機
眠るなど許されてない涅槃像
永遠に会えないなんて信じない
この先もずっと一緒よ Forever
永遠に会えない友に苦笑い
永遠の夢物語胸の中

3点 誓詞から永遠の愛妻介護

永遠に一緒と言った夫は逝き

三枝なな

堀内きみ子

佐野正邦

青空

岩原一角

美代

船木しげ子

青空

ルイ

勘兵衛

岩原一角

久世高鷲

佐野正邦

由夏

加山勝久

岡野とら丸

島根写太

小林満寿夫

信子

島根写太

東尾由子

東尾由子

美代

3点 もしかして宇宙の果ては地球かも

永遠のゼロ蒼空に今も飛ぶ

永遠の誓い挫折の七年目

永遠の平和を祈り空に鳩

永遠に輝けないと月が哭く

4点 琥珀の中に眠る虫たち

永遠に戦は続くヒトの工ゴ

永遠の絆毎日メンテする

人間の性で戦争止められぬ

永遠に負けてはならぬロボットに

永遠の価値一瞬の行為に宿る

5点 式次第永遠の誓いの軽きこと

馬鹿な奴永遠に戦を繰り返す

永遠と誓ったはずの愛なのに

ずっとこのままです福助のお辞儀

6点 ノーモアヒロシマナガサキ八月忌

7点 合わせ鏡の中終わらない私

永遠の敵はもう一人の私

8点 腐らずに赤いトマトのまま

9点 永遠の若さを保つ好奇心

12点 わだつみは青年のまま母の胸

浜脇蓬生

平川柳

井澤壽峰

堀内きみ子

松島きよみ

浜脇蓬生

岡野とら丸

直子

武智三成

勘兵衛

蔵内歳重

ルイ

三枝なな

加山勝久

由夏

真鍋心平太

山野寿之

真鍋心平太

船木しげ子

平川柳

春田敏晴

林ともこ

春田敏晴

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。
得点が空白のものは前行の句と同得点です。

お題 「旅」 短句

互選

1点

贅沢三味SLの座席
手振り旅立つリュウツクの背中
旅の終わりに出会い新たに
円安に負け旅はお預け
足腰弱り尾瀬の夢みる
寅さんのあと追いかけてみたい
親を離れて一人旅です
フルムーンする夫婦睦まじ

小林満寿夫
美代

久世高鷺

林ともこ

青空

浜脇蓬生

武智三成

井澤壽峰

蔵内歳重

浜脇蓬生

三枝なな

蔵内歳重

武智三成

美代

岡野とら丸

由夏

平川柳

ルイ

信子

真鍋心平太

春田敏晴

平川柳

3点

石段はイヤ団子屋で待つ
八十路の旅は青春切符
お遍路の旅 同行二人
さよならの前旅する二人
海岸線をあきるまで旅
青春切符まだ持っている
もう一度行く俺たちの旅
色恋沙汰の冥土の飛脚

2点

各地の行脚酒を楽しむ
親を離れて一人旅です
フルムーンする夫婦睦まじ
極寒の根室の旅籠一人客
故郷行きも旅路のうちか
定宿を決め旅のはじまり
若き日の旅出会いを求め
一人で行こう足摺の海

14点

老春の旅噛みしめる道
旅のコーヒーひと味違う
カタログで見る高級旅館
写真が若い夫との旅
カバンの傷も旅の思い出
あの夏の扉を開ける旅
山川超えた旅今八十路
光と風のでてくくの旅
ひとり旅終え黄泉に旅立つ
戸惑いながら豪華客船
ふるさとへ行く夜汽車で背伸び
旅の途中で気付く本心
自分に出会う終わりになき旅
しがらみ解いて行く旅の空
呱呱の声から人間の旅

東尾由子
信子
ルイ
青空
山野寿之
秋田あかり
堀内きみ子
東尾由子
久世高鷺
春田敏晴
真鍋心平太
直子
秋田あかり
堀内きみ子
山野寿之

今月の投句者（29名 敬称略）

井澤壽峰 加山勝久 久世高鷺 勘兵衛 島根写太
山野寿之 岩原一角 信子 春田敏晴 松島きよみ
武智三成 平川柳 ルイ 三枝なな 船木しげ子
真鍋心平太 青空 林ともこ 秋田あかり 美代
浜脇蓬生 直子 由夏 岡野とら丸 蔵内俊重
小林満寿夫 堀内きみ子 佐野正邦 東尾由子

皆様ご参加、ご協力ありがとうございます。

「京都」

真鍋心平太

ここ大津から京都まではJRで山科・京都と二駅10分という近さだが脊椎管狭窄で歩けなくなつてからももう六年ほど行っていない。大阪に住んでいたころは京阪電車で三条まで一時間近くかかったが月に一度は散策に出かけていたものだ。

もう一度昔のように歩いてみたいとリハビリを続けているのだが、このところの京都の風景を見るとたとえ歩けるようになったとしても、もう懐かしく覚えている京都には行けないことが分かり悲しい。

そのころ方広寺の国家安康の鐘つき堂は囲いもなく自由に入りが出来た。鐘の下には土産物をおばあさんが居て鐘を突くことも出来た。

丸山公園の池の端には腰かけてギターを弾くちよつと渋いアメリカ人がいてボブディランの「風に吹かれて」などを歌っていた。いつも20人ほどが聴いていた。

哲学の道の途中の法然院に谷崎潤一郎のお墓がある。〈浅ましい乱脈な都会になってしまった〉東京に嫌気がさした谷崎はここにお墓を作ったのだが、「一歩寺の境内に入るとあの通り森閑として心が静まります。」と瘋癲老人日記の中に書いている。

その前にあつたこじんまりした京風のブティックのオーナーは「真夏の出来事」を歌った平山みきだった。イエローがトレードカラーでときおり黄色い服を着てお店に立っていたのを見かけた。彼女はまだ現役。

哲学の道の入り口横に「日の出」といううどん屋があり、知る人ぞ知るカレーうどんのおいしい店だが、数年のうちに開店時から昼過ぎまでは1、2時間の行列があたりまえの店になってしまった。

賑に浮かぶ京都では周りを見回しても視界にはせいぜい二、三十人が目に入るくらいなものなので本当の京都とはああいう風景を言うのだろうかといまさらながらインバウンドの盛況の代りに失ったものの大きさが悔やまれる。

巻末の風景はそんな京都を思い出しながら描いてみた。前を歩いているのは亡くなった親友で追いかけているのが私だ。

川柳天守閣 連載 評論 「現代川柳の詩学」を考える ⑦

―川柳の技法(2) 比喩― 「古川柳」から現代川柳へ―

十八世川柳宗家 閑成庵川柳 平 川柳 (東京川柳会主宰)

柄井川柳選句集『誹風 柳多留』に収録されている「古川柳」には、さまざま比喩が用いられています。比喩とは直接的または間接的に類似的したものを比較し、関係づけて表現する技法のことです。

まず直接に二つのものを比較して喩える表現技法である「直喩」(シミリ)を取り上げてみたいと思います。これは「明喩」とも呼ばれています。この比喩を用いる場合、「君は薔薇のように美しい」などのありふれた常識的なものを結びつけるのではなく、意外性のある、飛躍した表現が求められます。

例えば、『誹風 柳多留』(初篇)には、次のような「直喩」を用いたよく知られた「古川柳」があります。

子が出来て川の字形なりに寝る夫婦

この川柳の前句は「はなれこそすれ、はなれこそすれ」です。子が出来ると、これまで並んで寝ていた「夫婦」

が「子」を寝かすために「夫婦」の間に「子」を入れて寝るので「川の字」のような「形」になるのです。

「夫婦」が「川の字」のように寝る姿は、「はなれこそすれ、はなれこそすれ」の前句の題をよくあらわしていますが、江戸庶民にとつて愛する人と結ばれて家庭を持ち、「川の字」のように「子」を真ん中に入れて「寝る」「夫婦」の姿は幸せな「夫婦」の家庭を象徴するものでした。

「古川柳」のこのような「直喩」の表現は、次のような現代川柳にも用いられています。

逆光線乞食羅漢のように立ち	十四世	根岸 川柳
鯛チリの骨ひこうきが墜ちたよう		川上三太郎
白雲の如く別れる駅に立ち		井上 信子
ハツとしたように切られた花ふるえ		三笠しづ子
墓碑あらば ト書の如く笑うべし		中村 富一
選挙権 馬券の如く掌にもてり		今井 鴨平
ゴッホの耳のように 皿が音楽を奏でる		田中 哲哉
球根を地雷のように埋めておく		野沢 大漁
帆を上げるように付け睫毛が動く		真島久美子

(続く)

第17回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「祭り」 小林満寿夫 選
「走る」 林 ともこ 選
「平凡」 互 選
「雑詠」 真鍋心平太 選
「日暮れ」(短句) 互 選
(投句 各 2 句)

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は
下記 URL から可能です。
<https://tensyukaku.com/>

投句、互選投票は会員登録が必要です。
会員登録は下記 URL より
https://tensyukaku.com/id_make.php

投句開始 2024年8月9日(金) から
投句締切 2024年8月15日(木) まで
互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。
8月16日(金)～8月19日(月)
披講発表 8月20日(火)から随時閲覧可能になります。

スマホは下記 QR コードから



投句・閲覧



会員登録



パステル画 「京都」
(クリックすると大きくなります。)

二〇二四年七月二十五日発行
ウェブ川柳天守閣会報

(発行責任者 真鍋心平太)

(編集人 真鍋心平太)

(事務所)

〒 520-0054

滋賀県大津市逢坂一丁目8-1

サンルシエル大津607号室

川柳天守閣

TEL・fax 077(532)4211

携帯 080(2672)4446